

# 『文京女子大学研究紀要』 発刊に際して

文京女子大学総合研究所所長 峰 島 旭 雄

平成11年度は文京女子大学にとって、開学10周年（平成12年度）記念への準備期間として、重要な意味をもつ。いうまでもなく、開学10周年は西紀2000年、ミレニアムの年であり、人類にとって、世界にとって、きわめて意義深い年であるが、本学に集約していえば、開学以来3年、5年、そして10年と、あたかも人生行路を行くがごとく進展してきた経緯を踏まえて、大きく発展する基盤を構築すべき大事な年なのである。

顧みれば、本学のルーツは75年余の遠きにさかのぼる。創設者、島田依史子女史は誠実（Sincerity）・勤勉（Diligence）・仁愛（Benevolence）の理想を掲げ、当時としてはまだ目新しい女子実践教育への道を切り開いたのであった。近時これに「共生」（Human Symbiosis）の理念を加え、いやむしろ、誠実・勤勉・仁愛の三徳目を現代において一つに凝集させて、この「共生」の精神を教育目標として、あるいは教育実践の軸として、打ち出したのであった。本学のカリキュラムを含む制度上の問題も、またその内実をなす学問上の問題も、すべてここに発し、ここに収斂しなければならないと考えられる。

文京女子大学は経営学部（平成3年度開設）・大学院経営学研究科（平成9年度開設）と人間学部（平成9年度開設）・大学院人間学研究科（平成11年度開設）から成る。そして学術上の研究は経営学関係では『経営論集』および『文京女子大学研究論集』、人間学関係では『文京女子大学研究紀要（人間学部）』として、公にされてきた。他方、平成9年度からは経営学部・人間学部の両方にかかわる総合研究所が設置された。ここに、学部・大学院を通じて学術研究面での交流を促進し、かつこれを統括する必要を痛感するにいたった。

その役割は、設置の趣旨・性格からして総合研究所が担うべきものであるとの観点から、西紀2000年、本学開学10周年を視野におさめつつ、ここに『文京女子大学研究紀要』を発刊する。それは、第8巻第1号まで刊行した『文京女子大学研究論集』（思想・文化、教育・心理、語学・体育等の広義の、かつ深義の教養にかかわる諸分野の論文を掲載）と第2号まで刊行しほぼ同じ分野の専門・教養論文を収載する『文京女子大学研究

紀要（人間学部）』の同様の論文と併収するものである。その意味では、新たなこの紀要は、基本的な理念である「共生」の諸相を究明し、まさしく両学部にまたがる、学問上の共生を具現する interdepartmental な研究集録として、意義深いものであるということができよう。

かくして『経営論集』は継続刊行され、『文京女子大学研究論集』および『文京女子大学研究紀要（人間学部）』はこの新たな『文京女子大学研究紀要』へと発展的に解消される。今後は人間「共生」の基本的な視座からして、両学部・両大学院の研究を促進し、その成果を世に問うことが、文京女子大学総合研究所に課せられることになる。

諸般の事どもについてのご叱正を乞いつつ、ここに『文京女子大学研究紀要』創刊号を世に送り出す次第である。